

第3回青森県人づくり戦略推進会議会議録

日 時：平成21年6月11日(木)

13:45～15:10

場 所：県庁西棟8階大会議室

(司会・県人づくり戦略チーム 柏木チームリーダー)

ただ今から、第3回青森県人づくり戦略推進会議を開会いたします。

はじめに、次第にありますとおり、第1部といたしまして、戦略策定後の様々な人づくりの取組について、幾つか御紹介いたします。

まず、1(1)といたしまして、人づくり戦略チームのこれまでの取組について、そして、県内で行われているキャリア教育の取組について、人づくり戦略チームの上野から御説明いたします。

(県人づくり戦略チーム 上野主幹)

人づくり戦略チームの上野です。私からは、人財育成に係る取組について御説明いたします。まず、人づくり戦略チームのこれまでの取組について説明します。

人づくり戦略チームは、御覧のような事務を所掌するため、平成18年4月に設置され、平成19年9月に「ふるさとあおもりを愛し、ふるさとあおもりの元気を作る人財の育成」を基本理念とする「あおもりを愛する人づくり戦略」を策定し、同年10月にこの会議を設置いたしました。

さて、人づくり戦略チームでは、基本目標ごとに、戦略で重点的に進めていくとした取組を実施してきました。

「あおもりの未来をつくる人財の育成」については、地域ぐるみのキャリア教育の効果的な展開を図るため、キャリア教育プラットフォームやキャリア教育連携促進テーブルなど、キャリア教育に関する情報交流や関係主体の連携を促進する仕組みづくりと、その運営を進めてきました。

今年度は、これまでの取組で培ったネットワークの強化と、キャリア教育に関するニーズとシーズのコーディネートを県から委託することで、地域ぐるみのキャリア教育を推進していくこととしています。

また、地域ぐるみでキャリア教育を効果的に進めていく一助とするため、キャリア教育プログラムを19本開発し、昨年はそのうちの6本について、県内各地で実際に取り組んでもらいました。後ほど、そのうちの1つについて、株式会社JMT Cさんから報告があります。

今年度は、地域でキャリア教育を進めていく中核的な人財として、地域キャリア教育プロデューサーを育成していくとともに、キャリア教育の啓発事業に取り組んでいくこととしています。

「あおもりの今のつくる人財の育成」については、挑戦意欲に満ちた地域産業や地域づくりの担い手の育成に向けた事業に取り組んでいます。

平成 19 年度は、地域の元気を作っていく取組として、地域の隠れた人財に光を充てるテレビ番組を高校生が制作する「あおもり人財の環づくり事業」を実施しました。

向かって右の方は、そのプロモーションの番宣になっております。五所川原商業高校の生徒さんたちが、自分たちの学校の P T A 会長を取材して 7 分から 8 分ほどの番組を作り、15 分枠の中で放送いたしました。現在は、皆さん卒業しております。

単年度限りの取組でしたけども、関係者が高校生の番組づくりを支援していく団体を結成し、この事業の社会的意義に賛同した放送会社とともに事業を継続して実施しています。

また、昨年度からは、本県の経済や地域づくりを牽引していくチャレンジ精神あふれる人財の育成とそのネットワーク化を目指し、若手、中堅を対象とした「あおもり立志挑戦塾」開催事業を青森公立大学と協働で進めています。

さらに、地域 SNS を活用し、本県に有意な情報を持つ首都圏等の人財と、起業・創業・経営革新、地域づくり等に取り組む県内の人財とを繋いでいく「首都圏発あおもり人財ネットワーク構築事業」も進めています。

これらの事業は、人財の育成を図りながら、継続的に取り組んでいく仕組みづくりも目指してきたものです。

今後は、これまで説明した取組の成果や課題を踏まえ、本会議のもとに設置した、産・学・官・金融連携促進検討部会で、産・学・官・金融連携の仕組みづくりについて検討していくこととしています。

特に、キャリア教育支援機能や地域経済や地域づくりをけん引していく人財の育成機能、人財育成を推進するための拠点の機能について、産・学・官・金融連携の仕組みづくりの課題や方向性を集中的に検討することとしています。部会長は、八戸高専の井口校長にお願いしており、来年 6 月には、本会議に報告を予定しているところです。

委員の皆様には、今後とも御指導くださるとともに、人財育成は県のみが進めるものではありませんので、一緒に事業を進めたり、あるいは自ら取り組んでいかれることをお願いいたします。

続きまして、県内で行われているキャリア教育の取組について御紹介いたします。

向かって左の写真は、平成 19 年度に当チームで開発したキャリア教育プログラムを弘前大学教育学部附属小学校で実施している様子です。

右の写真は、東北電力さんが、子どもたちの個性や才能を伸ばすことができる環境づくりのために実施している取組で、自らの得意分野を生かした出前講座の様子です。

左の写真は、株式会社八戸インテリジェントプラザが国の委託を受けて実施した「ものづくりインターンシップ」の様子です。高校生がインターンシップという形で企業の「カイゼン」活動に参加した様子です。

右の写真は、生涯学習課が実施している、高大連携キャリア形成支援事業の様子です。高校生と大学生の交流の場を設け、キャリア形成に向けた意識やチャレンジ精神を喚起することを狙いにしています。

このように、キャリア教育に関する様々な取組が、様々な主体により実施されています。

引き続きまして、様々な主体による取組の様子について御報告をお聞きいただければと思います。私からは以上です。

(司会・柏木 T L)

それでは、続きまして、あおもり型キャリア教育プログラムの実践事例について、昨年度、三八キャリアプログラム実行委員会として、事務局を務められた株式会社 J M T C の代表取締役社長、森繁己様より発表をお願いします。

(株) J M T C 森社長)

御紹介いただきました、J M T C の森です。

小学生と一緒に取り組んだプログラムです。

一通り説明が終わった後で、私どものポジションを説明したいと思います。

自分たちの町の周りに、仕事というキーワードでいろいろ考えてもらう。それをひとつ、どんなアプローチがいいのかなということを取り上げました。

もちろん、地域ですから、学校とか子どもたちが普段接している場の中から、いろんなことを集約するプロセスなんですけども、ただ集約するといっても手掛かりが欲しいわけですね。手掛かりには、何がいいのかなということで、次の画面になるんですが、これは、まず職場を見ましようということで、会社の方に御協力をいただきました。宮崎養鶏場さんですね。実際に卵が製品化される、運んできて、実際にバック詰めするプロセスですね。これを見てきたところです。

それから二日目というのは、実際に町に出ましようということで、中心街の商店街を 11 店舗ですか、いろんな仕事があるんだなと。その流れの中で、普段、あまり見ることができない仕事の場を体験してもらうという内容でした。

一日目は、予備練習でもないんですが、取りあえず卵についての今思っていることを絵に描いてもらおうということで、子どもたちが中心ですので、どうしても楽しくなきゃいけないということで、お絵描きから始めたんですね。目玉焼きになるのを絵に描いてもらう。そういう作業です。これは、小学 2 年生です。

これも、同じように絵を描いている写真が入っていますが、当日参加していただいたのは、小学生の 2 年生から 6 年生までの方でした。

これは実際に養鶏場を訪問しての写真です。卵という、身近な食材ですよ。これが、どんなふうにして出来上がってくるかというところを、大分丁寧に分かりやすい説明をしていただきました。

問題は二日目なんですが、自分たちの中にあるいろんな仕事とか、そういうものを何らかの形で集約するというか、気付きを作るために利用したのがマップですね。マップを取りあえず事前に印刷しまして、通学路をずっとなぞってもらいまして、その通学路の中で普段、見たり、聞いたりしている商店とか工場だとか、そういうものをいろいろ色分けしてもらいます。この時に、やっぱりグループでやるものですから、非常に要領よく同じような職種とか何かは同じ色でとか。なかなか考えながら、子どもさんたちが作業をされていました。それは、楽しそうにやっていました。

それを今度実際に表にしまして、仕事の種類だとか、それからどんなことに役立っているのかなということを子どもさんたちの言葉で書いてもらいました。つまり、仕事理解と言ったらいいでしょうか。身近なところにある仕事を理解しようということで、子どもさ

んたちの言葉でまとめたものです。

これを幾つかやりまして、あとすぐに気付いたことをグループごとにプロジェクターに写して発表していただきました。これがその場面ですね。チームごとに仕事マップを発表すると。意外と気付きがあったのは、こんな身近なところにこういう仕事があるんだ。こういう職場があったんだということに気付かれたようですね。そんなのが、結構、感想として出ていたようです。

これは、実際に商店街を歩いているんですが、1番右側の普段入れないような映画館の映写室まで入って、案内していただきました。非常に、なかなか見ることができない場所を見せていただいて、御協力いただきました。あとは、いろんな保育所さんとか、貴金属屋さんとか、衣類関係だとか、子どもさんたちが利用はしているんでしょうけども、実際に働いている時の喜びは何ですか？とか、苦労は何ですか？ということをお子さんたちが、大人に対していろいろアンケートをしているところです。

これは、新聞で紹介された記事を載せてあります。丁度、写真を撮るのもやっぱり現場の写真が生き生きとしているものですから、養鶏場さんの現場の写真と映画館の説明のところですね。

幾つか、二日間体験する中で、子どもさんたちの気付きは何ですか、それから、家族の方にも本来同行して、いろいろ後で発表なんか見ていただきたいというのもあったんですが、なかなか、その家族と一緒にジョイントというのは、ちょっと難しかったようです。やっぱり、行動したことによる変化といいますか、お手元の資料を見ていただくと分かるんですが、子どもさんがちょっと行動的になってきていることが理解できると思います。

成果と課題ということで、仕事に対してどういうアプローチをしたらいいのかなというのが、身近なところから仕事をするという、ここのところが1つのポイントだったように思いますね。

どうしても小学生ですので、あまり盛沢山のことは出来ないんですが、絵を描いたり、実際に見たり、聞いたりして、行動しながらまとめていく、気付いたことを発表する。そういう流れが作れたのは良かったかなと思っております。

まとめのところは、これは私どもの社員の市川が理論的なことをちょっと、クルンボルツなんて理論を使ってやっています。これは、要は、いろいろ学習プロセスのデメリットを紹介しているところです。

一応、これが昨年度取り組んだ内容です。こういう活動に取り組んでの振り返りをしてみますと、なかなか子どもさんたちをこういう活動に参加させるのは、大変困難があると。1つは、学校の行事とか何かで、実際に子どもさんたちを集めるというのは大変だなと。それだけ子どもさんたち、忙しいんだなというのがよく分かりました。

それから、やっぱり、地元の方のいろんな町のことをよく知っているグループの方の御支援をいただきながら活動が出来たということで、こういうところには、大人の方たちの協力といいますか、そういうものが非常に必要です。準備のために、結構、時間は掛かったようですが、何とか実践することが出来たということですね。

残り1分なんですけども、私どもの会社は何をやっているかと言いますと、主にハローワークさんの再就職訓練の委託訓練を行っています。得意なものは何かというと、学校関係

の方、御存知かもしれませんが、YESプログラムは、全国的にも実践例としては非常に多い方だと思います。

それから今、仕事関係、再就職関係でジョブカードですか。これも私どもの得意と申しますか、どうしてもキャリアコンサルティングが関わる分野ですけれども、そういうことを主な仕事として行っている会社です。

今回、こういう機会を与えられて、大変ありがとうございました。

(司会・柏木TL)

森様、大変ありがとうございました。

それでは続きまして、高校生の皆さんによる、県産ごぼうと長いもの商品化。これにつきまして、県立三沢商業高等学校の長根さん、千葉さん、村田さん、山本さんから発表をお願いします。よろしくお願いします。

(三沢商業高等学校)

青森県立三沢商業高等学校です。よろしくお願いします。

本校では、平成16年度から商業の実践として、地域教育力の支援を得た、仕事に学び・人に学ぶ、実体験教育プランを実施しています。

実体験教育プラン推進組織図でございます。

関連図の特徴的な3点についてお話いたします。

まず、第1に本校と三沢市が連携した上で、三沢市政策財政部を窓口にも総合企画をし、地元産業経済団体のおいらせ農協、三沢市漁協、三沢市商工会、三沢市観光協会及び三沢市経済部産業政策課と、テーマに則した具体的実践活動を展開する組織編成としています。

第2に生徒組織です。3年生の課題研究として、市役所部会、商工会部会、農協部会、漁協部会、観光協会部会、イベント部会、報道部会、経理部会、ビジネスプラン部会の何か1つの部会に属し活動することとしています。

そして、グループごとにそれぞれの地域ビジネスプランの創造を課題として、週1回午後、教育課程の中で校外での地域連携型総合学習を展開しています。

第3に今年度は、青森県教育委員会新規事業「高校生地域貢献推進事業」とも融合し、事業展開のための人的支援、予算的措置をいただき、活動を展開することとしています。

また、本校卒業生税理士による税理士部会を組織し、生徒の実体験、経理部への指導をいただき、今年度から本校の後援会に1円株式会社を設置することとしています。

各部会の事例を代表し、本日はここにしかない、アイスビジネスプラン、みんなで食べよう長いも、ごぼうアイスの発表をいたします。

私たちは、平成19年度の先輩方が考案した、青森県が生産日本一であり、三沢市の特産物である長いも、色白ごぼうを使った「長いもアイス」「ごぼうアイス」をもっとPRし、三沢市内の人をはじめ、全国の多くの方々にも知ってもらうため、ビジネスプランを展開しています。

材料である長いもや色白ごぼうは、JAおいらせから提供していただいた、はじかれ野菜を有効に活用しています。はじかれ野菜とは、商品として売ることの出来ない規格外の野菜

のことです。規格外の長いも、ごぼうは、処分するだけでも費用が掛かり、それを譲ってもらうことで、JAおいらせの費用削減にも繋がります。

JAおいらせによると、はじかれ野菜は、業者にお金を払って処理してもらっているとのことでした。平成18年度園芸作物統計資料によると、長いもは1,060トン、ごぼうは580トンのはじかれ野菜が出ます。その処理のために、年間約1千万円以上の費用が掛かります。そのはじかれ野菜を無償で提供していただき、アイス製造に役立てることは、今後、農家にとって新しいビジネスとなる可能性もあるのです。

私たちは、長いもアイスとごぼうアイスの美味しさをもっと多くの人に知ってもらい、商品化し、全国に広めることを目標としています。

そのためにポスター、パンフレット、ラベルなどが必要だと考え、そのアイデアに取り組みました。19年度の先輩方は、アイスのアイデアを企画、製造し、文化祭で販売するまでを行いました。20年度は、御覧のような活動を行いました。

その活動について、商品製造、商品広告、販売交渉の3つに分けてお話しします。

まず、商品製造について説明します。

最初にアイスの材料について知るために、ごぼう掘り、長いも掘りを体験しました。JAおいらせ指導課の方に、三沢市を代表するごぼう農家の方を紹介してもらい、ごぼう掘りをしました。

ごぼうは黒いというイメージがありますが、洗ってみると色白ごぼうと呼ぶだけあって、本当に白かったです。実際に生で食べてみると、クセもなくシャキシャキしており、色白ごぼうの良さを実感することが出来ました。

次に長いも掘りを体験しました。長いもを掘るためには、穴を深く掘り、掘り出す時には、少しでも触れてしまうと長いものに傷がついたり、折れたりするので、慎重に作業をしなくてはならず、とても大変でした。

また、新たなアイス製造先を探すことにしました。今までは、熊本県のアイス製造業者、パストラルに製造を依頼していましたが、熊本県で製造したものは青森県産と言えず、地産地消を実行出来ない、遠いため商品の改良など不便である、送料などのコストが掛かる、という問題点がありました。

そこで、青森県内でアイスを製造出来る企業を探したところ、道の駅奥入瀬ろまんパーク・味楽工房を見つけ、アイスを製造してもらえないか依頼したところ、引き受けてくださいました。

はじめに、試作品として、ごぼう1種類、長いもは普通タイプと増量タイプの2種類を作ってもらいました。牛乳の違いがあるせいか、ごぼうは以前よりさっぱりとしていて美味しくなりました。長いも増量アイスは、普通タイプよりツブツブ感がなくなり、コッテリした後味がさっぱりしています。味わた結果、ごぼうと長いも増量タイプの製造をお願いすることにしました。

次にアイスのラベルやパッケージ、そしてパンフレットにカロリーや成分の表示を付け、ほかの商品と差別化し、ほかにPR出来る成分を探すことも兼ねて、青森県薬剤師会の衛生検査センターに成分分析を依頼しました。

結果として、次のような分析が出ました。

長いもアイスは、普通のバニラアイスよりカロリー控え目。ごぼうアイスは、ナトリウムが少なく、健康を気にする人にも美味しく食べてもらえるという結果が出ました。

様々な機会にアイスを購入してくれた方々にマーケティングも兼ねてアンケートを実施しました。このアイスをもた食べたいか、という質問に対して、「はい」と答えた人は長いもが96%、ごぼうが82%でした。

この結果を踏まえ、改良を加えながら沢山の人に味わってもらえるアイスにしたいと思っています。

次に商品広告について説明します。

アイスをPRするきっかけとして、青森県総合社会教育センター主催第2回「おらほの田舎スイーツコンテスト」へエントリーしました。このコンテストは、昔ながらのお菓子や地元の食材を使ったお菓子を全国に広め、青森県の活性化のために行われています。

平成20年度は、古牧温泉青森屋で行われました。応募131品の中から、1次審査で32品の中に選ばれ、ながいも、ごぼうアイスともに、2次審査に進みました。

そして、ながいもアイスが佳作、ごぼうアイスが準グランプリを授賞し、特別賞として、古牧温泉賞もいただきました。

今までのアンケート結果から、ごぼうアイスはあまり人気がなかったのも、とても驚きました。また、古牧温泉からバイキングのメニューに加えたいという申し出もあり、そのチャンスを生かし、古牧温泉とのビジネスとして取り組みたいと思いました。

次に私たちは、ラベルとパッケージシールを改善することにしました。

19年度の先輩方が考案したシールは、パッと見ても印象に残るようなデザインではないため、私たちは商品の差別化も兼ね、農協部会の生徒が作成したオリジナルキャラクター長いもの「ながたろう」、色白ごぼうの「ご~ぼ君」を使うことにしました。

ラベルの真ん中にながたろう、ご~ぼ君を描き、ミルクアイスなので、左に牛を、右に学生カバンを持たせた三沢商業の生徒を描くことで、オリジナリティや高校生らしさをアピールしました。

このラベルは、JAおいらせや衛生検査センターなど、様々な方面から高い評価をいただきました。

また、成分分析結果を載せるため、側面のパッケージも作りました。畑の中にアイスがあるというイメージで緑色にし、栄養成分表示と原材料を載せています。

現在は、材料が全て県産品となり、青森県産品イメージキャラクター「決め手くん」の使用許可をいただいたので、「決め手くん」が載ったパッケージで販売しています。

これからのアイスの販売に備え、アイスについてもっと知ってもらうために、今まで集めた様々な情報を詰め込み、パンフレットを作成しました。アイスと長いも、色白ごぼうの情報を盛り込みつつ、どうすれば見やすくなるのか、考えながら作成しました。

次に今まで作ったラベルやパッケージのフォントサイズや、アイスの保管温度などを教えてもらうために、上十三保健所に行きました。

その時に、製造業者がしっかりしているため、カップのまま販売するのであれば、保健所の許可が無くても良いことを教わり、三沢商業の生徒が販売しても問題ないことを教えていただきました。

アイスの製造や広告について、準備も整い、いよいよアイスの販売活動を始めました。

文化祭や農協祭といった三沢市内での販売を経験した後、平成 20 年 11 月 8 日、青森県教育委員会主催の「あおもりっ子食育サミット」に参加し、長いも、ごぼうアイスを販売しました。

同日は気温が低く、果たして売れるのかと思いましたが、用意した 100 個、全て完売しました。また、青森テレビの取材も受けました。

最後に企業への販売交渉について説明します。

まず、最初の販売先として、私たちは、古牧温泉青森屋に販売交渉を行いました。古牧温泉は、以前、田舎スイーツコンテストでお世話になっており、青森らしさにこだわっているホテルです。私たちのアイスは、材料が全て県産品になったため、このコンテストにぴったりだと思ったからです。

古牧温泉の総支配人と総料理長に対し、材料が全て県産品であることや、三沢商業生が考案したこと。アイスを作るまでのストーリーをアピールしました。

3 回に渡る交渉の末、古牧温泉の館内にある県産品のみを扱っているレストランでのバイキング、売店での販売が決まりました。

平成 20 年 12 月 1 日の販売当日、私たちはぬくもり亭のオープニングセレモニーに参加しました。沢山の方々がアイスを食べにきてくれました。食べた人に「美味しい」と喜ばれ、今までの頑張りが形になったことが、とても嬉しかったです。また、テレビや新聞など、沢山の取材を受けました。

今までの取組から、長いも、ごぼうアイスは、流通経路を確立し、販売店をさらに開拓して、県内はもちろん、全国展開を目標に活動していきたいと思えます。

そのために道の駅の売店で、地産地消を展開します。そして、全国展開に向け、知名度アップを図るため、県南の空の玄関口である三沢空港の売店や、青森県を代表する観光地である十和田湖にて販売しています。

現在は、アイスを外国の方に販売するために、三沢市にあるアメリカ空軍基地内のショッピングセンター、そして、全国展開の起点として、東北新幹線での社内販売を実現するため、日本レストランエンタープライズと販売交渉を続けています。

私たちのビジネスプランを更に前進させるため、今年度はアイスを担当する生徒を増やし、部門ごとに仕事を担当することにしました。

販売交渉部門は、実際に企業に出向き、アイスを買ってもらうための商談を行います。商談が成立すると、営業部門の生徒が販売先で、販売促進活動を行います。販売促進に必要なポスターやパンフレットは、宣伝広報部門が担当します。そして、取引先が多くなるにつれて、販売するアイスの量が増加することが見込まれます。

売上金額増加に伴い、今までの状態では対応出来なくなるため、本校の後援会の協力を受け、本校卒業生と税理士の方々から御指導を受け、株式会社を設立しています。これは、経理部門が担当します。

終わりに、私たちは様々な方々の協力のもと、アイスの生産から流通、そして販売までの仕組みを作り、「皆で食べよう、長いも、ごぼうアイス」を目標に活動してきました。

今まで学んだ沢山のことに生かし、今後もここにしかないアイス、ビジネスプランの達成に

向けて努めていきたいです。

これで、青森県立三沢商業高等学校の発表を終わります。御静聴、ありがとうございました。

(司会・柏木TL)

三沢商業高校の皆さん、大変ありがとうございました。

続きまして、「あおもり立志挑戦塾」成果報告について、「あおもり立志挑戦の会」会長、若井暁様より発表をお願いいたします。

(あおもり立志挑戦の会 若井会長)

ただ今御紹介にあずかりました、若井暁と申します。

「あおもり立志挑戦の会」の会長を務めております。三沢商業高校の皆さんのプレゼンテーション、素晴らしかったですね。私も、長いもアイスは古牧温泉でいただきましたけども、こういうふうになられたんだということを知り得て、今日、本当に良かったと思っています。

それでは、あおもり立志挑戦塾の報告をしたいと思います。

「あおもり立志挑戦塾」は、20代から30代の若者を中心とした、地域づくりや経済発展をこれから目指す人材を育成する塾として運営されました。塾長に財団法人日本総合研究所理事長の野田一夫さんを迎え、2008年7月から12月まで、1か月に一度、一泊二日の日程で全6回開催されました。

私たち塾生は、それぞれフィールドは異なっても、心では思っている、会社や友人になかなか言えないようなこと、つまりは、今後の青森県がどうあるべきかを大いに語り合いました。そして、それぞれ方法や手段の異なりがあっても、同じベクトルへ向かうであろう大切な仲間を手に入れました。

塾では、著名な方の講話を拝聴し、それに基づきグループディスカッションを深夜まで行いました。青森の明日をよりよいものにしようと、回を重ねるごとに熱く議論をいたしました。

その全6回の塾を通して、私たち塾生の成果物は、「知らないということを知ることが出来た」、これがキーワードです。何が知らないのかは、後で説明いたします。時系列順にどのような講師の方がいらしたのか、どういうことを学び、考えたのか御紹介します。

第1回、前大分県知事、平松守彦さん。一村一品運動の提唱者であり、グローバルという造語を作った方です。一村一品運動は、地域にある資源・文化・技術を活用して、地域経済を活性化する運動です。この運動は、今や日本から世界に派生しております。

一村一品運動で1番大切なことは、どこの村、町にも宝はあるということ。ものづくりをするということは、人づくりであるとおっしゃいました。この運動は、全てが成功していたわけではなく、失敗も当然ありました。大事なことは、失敗した後にもう一度チャレンジするという言葉で締め括りました。

第2回ソロアルピニスト、栗城史多さん。

札幌市在住の26歳で、登山を始めて僅か5年で7大陸、セブンサミットのうち6つを単

独無酸素で登頂した方です。セブンサミットを単独無酸素で登頂した人は、長い歴史の中でも一人しかおりません。世界で二人目になるかもしれないという方が、日本人でいるにも関わらず、私は知りませんでした。

栗城さんの講話は、日常では知り得ないことばかりでした。例えば、エベレストの入山料というのが、山に入るだけで、御存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、一人 240 万円だそうです。そういったお話ですとか、そのほか、下山の時に事故が多い。目的達成の後ほど気を付けなければならないということ。天気が悪ければ、必ず良い天気になることなどは、経済もそうであり、ビジネスにも相通ずる発言がありました。

時間の関係で第 3 回はお名前だけ紹介します。元宮城リコー社長、富田秀夫さん。

第 4 回、由布院玉の湯、溝口薫平さん。NHK のプロジェクト X でも取り上げられた方です。大分県の由布院を作られた方の一人でもあります。由布院は、オープンを心掛け、旅館の主や料理人、従業員同士、お互いに情報を交換し合っているそうです。

目的を一緒にすることが大事だというふうにおっしゃいました。由布院をよくしようと思うことは、青森では地域をよくしよう。もしくは、会社をよくしようと思うことと同様ではないでしょうか。

それから、時代が変わってきたことを認識すること。危機感の共有こそ、目的意識に繋がるのではないかと。そして、各物事の得意な人にリーダーになってもらい、年齢に関係なく責任を与えることが大事だとおっしゃいました。

第 5 回、作家高橋克彦さん。岩手県釜石生まれで、現在も盛岡市在住です。NHK 大河ドラマ「炎立つ」や、「北条時宗」の原作者としても有名な方です。高橋さんの言葉で、塾生一堂が忘れていた何かに気づきます。そのキーワードは、ふるさとを知ることがすぐにいるいろな成果に結び付くとは思わないが、自分が生まれ育ったふるさと、土地に対して誇りを持ってない人は、多分、何も出来ない。形としては、出来るかもしれないが、本当に深いことは出来ないと思う。

第 6 回、株式会社展勝地代表取締役社長、軽石昇さん。りんご行商中心の八百屋から、平成 2 年に公設民営の株式会社展勝地の代表取締役となり、現在に至ります。

軽石さんの講話で、地域づくりのキーワードが 3 点ありました。利益を上げるのではなく、地域らしい商品を作ること。2 つ目に、どうしても開発上で自然に手を入れなければならないのであれば、女性の黒髪にかんざしを入れる程度であること。3 点目に、話し合いをする時は、出来る人と出来ない人を組み合わせると、良い企画が生まれる。いろいろな観点から考えた方が良く、ということだと解釈しています。

私どもの塾長の言葉で心に残ったことは、いろいろなことを言っていたいたんですが、内容が過激なことが多いので、本日も割愛させていただきます。

全 6 回の塾を通して、私たちが学んだこと。1 番始めのところに戻りますが、知らないということを知ることが出来た。知らないとは、青森県各市町村で行っているイベントや取組、お祭りや伝統工芸、特産品や食べ物、飲み物といった食文化。小さなコミュニティでも志があり、活動しているグループやチームなど、あらゆる部分で、他県でも、世界にも誇れるものが沢山あるということを私たちは、この地で暮らしているのに、この地の恩恵を受けているにも関わらず、関心がなかった。知らないということを知ることが出来たのです。

まだまだ我々には、青森の良いところを知らないことが多く、知るという挑戦をしていくことの必要性を実感しました。

そこで、これからのキーワードがこちらです。「知ることを続けよう」です。より良い、青森の明日の糧になるような、青森の元気の源となるべく、立志し、挑戦し続けることを胸に、我々ARCという「あおもり立志挑戦の会」のことですが、2009年2月13日の金曜日という、大変縁起の良い日に立ち上げました。各々の活動が分かるように、このようなホームページを作成いたしました。

主な活動としては、定期的に地域活動に関する取組についての意見交換や会員相互での会社訪問等をしております。そのほかに、青森にはまだまだ知られていない場所、もっと知ってもらいたい場所、これから知ってもらいたい場所があると考え、まず自分たちがその場所を見に行こうということで、視察を始めました。

いろんなところに視察に行きまして、例えば、皆さんが御存知だ、御存知だと言っても、弘前城の桜が何本あるかとか。築城、何年経っているのかと。そういうことを知っておくと、青森以外からお越しになった方に、その地域の良さを説明できる、PR出来るのではないかとすることをしに、いろんな地域に行っております。

一番私どもも驚いたのは、会員の中にりんごの生産者がいたんですが、その生産している現場に見に行きましたら、会員の中には、木になっているりんごを見たことがないという、40代の人間もおりまして、大変有意義な時間を得られました。来週の金曜日からは、東通村、六ヶ所村で一泊二日の行程でエクスカッション、これは視察です。実施いたします。東通村の原子力発電所内の視察、東通村小中学校の視察、六ヶ所の風力発電所の視察も行います。

それから、8月には、五所川原立佞武多の館も塾長と一緒に視察する予定です。

最後に、私たち、あおもり立志挑戦の会は、これからも知るということを継続していきます。御静聴、誠にありがとうございました。

(司会・柏木TL)

若井様、熱いプレゼンを大変どうもありがとうございました。

事例発表は以上でございます。

次に第1部の(2)人財育成に係る平成21年度予算の概要は、お手元に資料4としてお配りしております。

時間の関係もありますので、説明の方は割愛させていただきますが、これらの事業もあいまって、そしてこれまでの取組の成果と課題を踏まえつつ、引き続き、当戦略会議として、「あおもりを愛する人づくり戦略」に関する取組を更に推進していければと考えております。

また、先ほども御説明いたしました、今年度、当戦略会議に設置いたしました、産・学・官・金融連携促進検討部会におきまして、これまでの取組の成果や課題を踏まえながら、関係機関の連携による人財育成の仕組みづくりについて検討を進めております。

本日、御出席の関係団体の皆様方におかれましては、引き続き御理解と御協力をお願い申し上げます。

それでは、引き続き第2部で意見交換をさせていただければと思います。

【第2部】

(司会・柏木T L)

それでは引き続き、第2部をはじめさせていただきます。

三村知事より御挨拶申し上げます。

(三村知事)

本日は、お忙しい中、また、雨の中でございますが、第3回青森県人づくり戦略推進会議に御出席を賜り、誠にありがとうございます。

また、皆様方には、常日頃から県政推進にあたりましても、それぞれに格別の御理解と御協力をいただいております。合わせて感謝申し上げる次第であります。

また本日、株式会社J M T Cの森社長様、三沢商業高校の生徒の皆さん、「あおり立志挑戦塾の会」の若井様、御多忙にも関わらず、キャリア教育や立志挑戦塾での取組について、まさに実践例を、現場での実践例を発表してくださいました。厚く御礼申し上げます。

さて、昨年来の世界的な金融危機の影響を受けまして、私ども、青森県の社会経済情勢におきましても、一段と厳しさを増している中であります。県では、そういった中でありますが、県では本年度から今後の県政運営の新たな基本方針となります、「青森県基本計画未来への挑戦」をスタートさせました。この計画では、県民一人ひとりが誇りを持ってこの青森の地で生き生きと働き、そして生活していくことが出来る社会を実現したい。そして今、まさにこの年に生まれた子どもたちが大人になった頃、二十歳になった頃、この青森で暮らしたい、暮らしていける、そう思える青森県を作っていきたいという思いを込めまして、県民一人ひとりの経済的基盤の確立、すなわち、生業づくりに力を入れていくこととしております。

私たち青森県が目指す生活創造社会を実現していくために、何よりも大切なのは、その礎となります「人財」、人の財(たから)であると考えております。「人財」の育成こそが、未来の青森県づくりの基盤であると、私は確信するところであります。

そこで、御案内のとおり県では、「あおもりを愛する人づくり戦略」に基づきまして、関係機関の皆様方と連携・協力のもと、「あおもりの未来をつくる人財」、そして、「あおもりの今をつくる人財」、この育成に重点的に取り組んでいるところであります。

と申しましたものの、人財の育成は一朝一夕にはなし得ない、まさに百年の大計であると考えます。教育界、産業界、地域・行政などの関係者が一体となりまして、中長期的な視点で持続的・継続的に進めていくことが重要であるとも考えます。

本日の意見交換を通じまして、人財育成の取組の充実に向け、思いを、皆様方と思いを共有するとともに、さらなる連携強化への御協力ということをお願い申し上げます。本日は誠にありがとうございます。

(司会・柏木T L)

それでは、引き続き会議を進めてまいります。

なお、本会議設置要綱の規定により、議長が会議の進行を行うこととされておりますので、ここからの進行は議長である知事にお願いいたします。

(三村知事)

それでは、議事の1であります、意見交換会及び情報交換に入りたいと思います。

ここからは、本日第1部において発表していただきました様々な取組事例、これも踏まえながら皆さん方で是非、それぞれの思いとして人財育成ということについての意見交換、情報交換を行っていただければと思っております。

人財育成につきましては、各団体とも、これまで様々な取組を進めておりますが、例えば、取組を進めていく上での課題でありますとか、今後の取組のやり方、方向であるとか。各団体での取組状況等について、あるいは率直に皆様方が考えておられます、本当にこれは人財育成、いろんな方向性があると思います。そのお考えにつきまして、御発言をいただければと思います。どなたか、ございませんでしょうか。九戸さん、いかがですか。

(社団法人青森県観光連盟 九戸専務理事)

今回初めて出させていただきました。先ほどの三沢商業高等学校の大変頼もしい発表、私ども、2010年12月に東北新幹線の全線開業を控えて、今、まさに皆様方からいろいろなコンテンツをいただいて、束ねていかなきゃいけないという立場からすれば、大変心強く、頼もしい限りだと思います。是非是非、着実にプロのアドバイスをいただきながら、着実に実現、車内販売できるように、皆さんのアドバイスを真摯な立場で聞いて、育っていただければと思います。

それから、立志塾のお話でしたが、大人として冷たい言い方をすると、じゃ、立志塾に参加しなければ気付かなかったのか、という素朴な疑問が残ります。それが、私ども、情報提供する側からすれば、県もそうですし、いろいろな団体は積極的にいろいろな情報を提供しているんです。でも、それがなかなかキャッチされていないという、それは情報の提供の仕方が下手なのかもしれない。でも、もしそれがなければ、県内各地でいろいろに行われている、創られているものが、素晴らしいと気が付けたらどうかと。そういう危惧を抱きました。野田先生が、檄を飛ばしながら、かなり厳しいお言葉で気付きを促していったからこそ「やねばまねな」と思っていたのかと思います。

とすれば、これからもうかなり過激な人づくり展開をしていかなければいけないのかなというふうにお話を聞いていて思いました。

(三村知事)

という話があったので、折角だから、立志挑戦塾。

(あおもり立志挑戦の会 若井会長)

九戸様の御質問にお答えいたします。

まず1点目。その塾に参加しなければ気付かなかったのかという御質問ですが、気付かなかったことはなかったかもしれませんが、でも、気付くまでの距離がグッと縮まったことは確かです。

そして2点目。その塾に参加しなければ、皆、知ることが出来ないのかという御質問がありましたけども、この塾に参加した人間が、それぞれの地域でリーダーになればいい。その

リーダーから情報を発信すればいいので、皆さんが参加する、出来れば参加していただいた方が早いかもしれませんが、皆さんが参加することはないかと思います。

(三村知事)

という感じでいろいろ意見が出てきたので、どなたかございませんでしょうか。

我がNPO隊から、どっちか先に。小笠原様。

(特定非営利活動法人NPO推進青森会議 小笠原事務局長)

NPO推進青森会議の事務局長をしております、小笠原でございます。

本来であれば、理事長に御案内いただいておりますが、代理ということで出席をさせていただきます。

我々、NPOは市民活動支援だけではなく、コミュニティビジネスということで、地域の資源を発掘して、それをビジネスとして継続してやっていくようにアドバイスもしております。先ほどの三沢商業高校の発表を聞いていて、やはり地域のことに気付いて、そしてそのところから継続的にどう運営していくのかということ早くから学べるということは、非常に良い機会であると感じました。最近では、やはりインターンシップでも、大学生の方が来ているんですね。ですから、その中で、地域に、何かに気付いて、そして活動をするということが非常に重要でもあります。また、ここ数か月なんですけど、緊急雇用であったりとか、ふるさと雇用とか、そういった形で、雇用というものも我々のところでも、また皆様のところでもこれからというところがあるかと思うんですが、来ているんですね。やはり、そういった人たちが、ただ単に期間だけの育成ということだけではなく、これからの次の活動であったり、また、組織に残ってキャリアを積んでいくということも非常に必要であるなということも考えています。そういったところからしますと、今日の、若井さんのお話にもあったように、立志塾の活動の中では、それぞれの地域で、自分たちの感じたことを伝えていくということが、それぞれの地域活動であったり、また、それぞれのビジネス、新しいビジネスに繋がっていくとすれば非常に良いことと思います。

我々としても、このような活動をしているから地域のことが分かるんですが、なかなか知り得るチャンスというのがないんじゃないかと思います。今、県の事業の中で立志塾ということで、良いチャンスを得られたということがプラスに思います。また今年度も新しい方々が入ってくると思いますので、そういった人たちがどんどん地域に広がって行って、我々も上手い具合にサポート出来る、上手くマッチングして、一緒に活動出来るというチャンスがあればいいと思います。

(三村知事)

ありがとうございます。

昨今、企業の社会貢献ということが問われると同時に、若い人たち、各年代ともそうですが、世の中の公、公益のことに役に立つ仕事を自分たちとして、いろんなことをしてみたいという層というか、そういう世代が出てきたと思っております。本当にそういう意味で日本の国っていいなと思っているけど、日本ってやっぱりいい国だと。そういう思いがあるんで

すけど。というわけで、やはり田中さんにもお話を。

(特定非営利活動法人あおもりNPOサポートセンター 田中理事長)

今のお話を聞いていて、私たちが今取り組んでいる3つのC。つまり、チャンスということが必要ですよ。それからチャレンジ、それからチェンジ、これが凄い3つのCがあるなと。私たちNPOもいつもこれを頭において、私たちだけの中間支援組織としての役割として、やはりいろんなNPOをネットワークしていくということ。それから各地域で、今、市民力で頑張っている皆さん、7月3日に国際子ども文化芸術交流のために、韓国の初等学校から10名のお子さん、表敬訪問いたしますので、その時も是非、お会い出来ると思うんですが。そういうふうに市民力で子どもたちの文化団体のネットワークづくりを始めていたりとか、国際交流も韓国便を無くしたくないと思うので、やっぱりやっているとか。そういうネットワークづくりに、この3つのCがとても今、大事なものだと思って頑張っています。

取組として、前回もお話しましたが、廃校の活用プロジェクトをやっている1番思ったのは、地域のお母さんたちが、やはり生業なりわいになっていくという、お母さんたちのパワーというのが凄くて、女性のパワーは凄いなと最近ますます思うんですが、地域、支援団体とそれからNPOという、そういうネットワークが出来てきたなと思います。

そういうふうに、いろんな地域で、今、頑張っているんですが。りんご王国と言われる青森県のりんごの木が最近随分切られていっています。高齢化と後継者がいないということで。

実は今回、ある絵を描かれている、紫綬褒賞もいただいた油絵の伊藤さんから御相談がありまして、何とか素人でもチャレンジしてみようかということで、りんごの木33本のオーナー制を取り入れて、全国の新聞に報道いたしましたところ、NPO梅田りんご園というんですが、五所川原で33本の木の、本当はもうちょっと高ければ良かったんですが、1本1万円オーナー制を設けて、全国発信いたしましたら、ニーズが凄く高くて、あっという間に締め切ってしまいました。最初5万円にしようか迷ったんですが。今、2万円にしようかと、失敗したなと思ったんですが。そういうふうに、ちょっと知恵とか、今の三沢商業さんじゃないけれど、地元にあるもので今、失われていってはいけないもの、大切なものを、何とか代わりになるものをNPOでもこれからミッションとして取り上げていくという時代に入っていたなと感じて、これは先例事例として1つ、何か皆さんにこういうのもあるんだということを知っていただければいいなと思って御紹介いたしました。

3つのCがこれからの人づくりにとても大事なことだと思います。

(三村知事)

チャンス、チャレンジ、チェンジ、そういう気持ちで歩いていこう。そういう気持ちこそ、まさにこれから大切な人づくりのきっかけになると。

(田中理事長)

キーワードになると思います。

(三村知事)

ありがとうございます。

今、NPOの方々から、そういうお話をいただいたわけですが、今日は、先生方にもお出でいただいております、実際の教育の現場の方から、どなたかまず最初に手を挙げていただけないものでございましょうか。

おのずと佐々木先生ということになったようでございますので。

(青森公立大学 佐々木学長)

立志塾に関しましては、青森公立大学、特に地域みらい学科の教員が全面的に協力いたしまして、無事、1回目が終わったと。それに続きまして、今年度も昨年と同じように続けてやらせていただくことになりました。

大学の方では、この4月に法人化いたしまして、少し今までの縛りを緩めていただいて、自由に大学の判断でいろいろ授業が出来るものですから。1つ考えていますのは、エクステンション教育として、ビジネス教育、あるいは会計教育というものを県内で力を入れていきたい。これは、単に日商簿記の資格を取るとかではなくて、むしろ一般市民の方にコスト意識、あるいは会計意識というものをしっかり持ってもらう必要がある。県内でいろんな出来事が起こりますけども、その1つの背景は、やはりコストとかパフォーマンスということについての意識がかなり薄いんじゃないかと。これはやはり、どういう形でビジネスをやるにしても、経営と会計というのは、いわばコインの裏表なので、いくらビジネスの研究をしても、もう一方ではコストの問題、会計の知識がなかったら経営というのは、実際には成り立たないんですね。

そういう意味で、本学では、幸いそういう会計学の教員が揃っているものですから、既にスタートさせましたが、会計教育というものを市民対象で力を入れていきたいと思っております。主婦の方、あるいは市民の方に是非、会計の仕組みというものをしっかり学んでいただくことから、ビジネスのあり方、あるいは起業の仕方、こういうことを勉強していったら良かった方がいいのではないかと考えています。

(三村知事)

先生、大変ありがとうございます。

実は、私ども、農業関係の場合、集落営農経営体が出来てくるものですから、これを引っ張っていける若手育成ということで、財務とマーケティング、これは絶対大事だということで一番重要視しております。

(佐々木学長)

青森県の場合には、農業も大変大事なんですね。やはり、自立したアグリビジネスと言いますが、農家が自立した経営として成り立っていくこと。そのためには、自分でコスト計算が出来るようにならなきゃいけない。そういう農会計というのは、立派なソフトが出来ているんですね。それを、我々としましては、農閑期といいますか、農家の方が暇な時に農家の方を対象に会計教育をやりたいと考えております。

(三村知事)

本当にありがたいお話をいただきました。

今日、教育委員会からも見えてますが、私どもは、農業高校で簿記の時間が必要ではないか、ということをお話しているんです。いわゆる就職にも必要ですけども、基礎的な部分として、これから農業ということをお考えた場合に、産業としての役割ということでそういうことを考えていました。どなたか、あと。高校生の発表を見ながら、どうでしょう。

(県教育庁 橋本理事)

人づくりということで、教育委員会でも先ほどの三沢商業さんをはじめとして、その地域に根差した、例えば、金木高校で太宰だけが金木じゃないということで、そこにあるいろいろな自分の故郷のそういうものを観光資源と、そういうことを見つめ直すんじゃないかということと、折角、三味線部があるんだから、三味線部が外に向かって活動していこうじゃないかと。例えば、そのように、今、高校生が手を挙げて、具体的な活動をしてきていると。

このように、学校、家庭、地域が連携した横の繋がりと、そして教育委員会では縦の繋がりと。幼・小・中・高・大という縦の繋がりの連携を深めて、継ぎ目のない教育をしていくという視点から取り組んでいます。

しかしながら、この縦と横で充実しながら人づくりをやっていきたいと思うんですが、やはりそれを支える基盤のところでは幾つか課題があって、例えば、学校支援地域本部なんかを立ち上げていった時に、これは大体、40市町村のうち21、半分しかまだ出来ていないのが実情ですし、コーディネーターも足りないということで、今後、いろいろ課題があると思いますので、皆さんと共に頑張りたいと思います。

(三村知事)

市町村関連の話が出ましたけども。

(青森県町村会 山口常務理事)

市町村でも、行政改革とかいろんな中で、採用人数を非常に抑えてきております。いろんな仕事をする中で、横の連絡あるいは悩む時、相談する相手が非常に稀薄になってきています。立志挑戦塾の野田先生は、大学やお役所に新しいものをお考えさせてもダメだとおっしゃっていますが、青森地区では、天野先生の協力を得ながら、社会教育研究所の中に町村の職員をいらせていただいて、それから、津軽地区では、弘前大学の協力を得ながら組織を立ち上げると。今後また、県民局の協力を得ながら、上北とか下北とか三八でも組織を立ち上げていく。

要するに、一緒に悩む相手を町村ごとの職員の中にネットワークを作ってあげて、というものを支援していきたいと思います。

(三村知事)

ということで、弘前大学のお話が出たものですから、大変申し訳ありませんが、よろしくお願ひします。

(弘前大学 須藤理事)

私、弘前大学の教育・学生担当の副学長です。

本学は教育と研究と社会貢献、社会貢献の形では、いろいろなことをしております。いろんな事例が今、出てきましたが、人づくりの基本は、私にとってみたら教育だと思っております。文科省の方からも、今、大学に求められているのは、高大接続ということです。これまでは、高大連携という、高校と大学の連携ということが言われておりましたけども、近年、高大接続です。例えば、高校でキャリア教育をされる。それが、次の段階でどのように発展するかという、ある種のラインがないと、それが個別、単発で終わってしまう可能性があると思います。

ですから、幼稚園を入れるかどうかというのは、多分、議論があるかと思いますが、小学校、中学校、高等学校、そして大学、そこが縦の繋がりで、今日のお話の原点であります。キャリア教育をどうするかということに関して、ある種の役割分担とか、ここはここまでとか、例えば、同じ職業観の育成といっても、小学校と大学が同じようなことをやれるわけがありません。ですから、その辺の組み合わせとか、そういうことが話し合われる機会があれば、何か非常に効率的になるんじゃないかと思っております。

さて、個人的には大学の一番の肝要なところは、やはり学生に教養を持って欲しいということ。教養はいろんな方々と地域で接することにより磨かれる。人づくりは、やはり人と接する機会が多ければ多いほど、私は充実していくと思っております。そのためには、自分の中に人と会話する時のネタが沢山あった方が会話が実りがある。例えば、クラシックを知らない、ロックも知らない、ジャズも知らない大学生が地域の人たちとどういう会話が出来ますか。映画も知らない、音楽も知らない。

我々、学生時代は、年上の人の話に合わせようと一生懸命勉強したわけです。ところが今は、我々は若者に合わせるために一生懸命勉強しています。時代がちょっとおかしいんじゃないかなという思いを私は大学生に向かって声を大にして言いたいです。

実を言いますと、先日、私の理事室の前に読書の紹介文を書かせていただきました。夏目漱石の『三四郎』を私は紹介しました。そうしましたら、ある学生は、「これ、柔道の物語ですね」と言うんですね。最近、夏目漱石も森鷗外も既に古典になってしまったという、そういう状況を私、個人的に憂っております。

ですから、やはり人づくりの場合に、ある程度、大学生には教養を深めて広めて欲しい。これは、確実に実りあるコミュニケーション力の養成に繋がるという具合に個人的には思っております。

(三村知事)

非常に原点に帰った話をいただいたような気がします。

商業高校の諸君、太宰治ぐらいは大丈夫？吉永小百合って知ってる？良かった、今、キャンペーンやるから。ということで、弘大の須藤先生からもそういう話があったので、恐縮ですけども、一番近い方でありまして、千葉先生と三上先生に、それぞれいろいろと今、お思いのこととか、どういうことが大切かとか考えていることをお話いただければと思いますが、よろしいでしょうか。

(青森県高等学校長協会 三上会長)

高大接続という話がありましたが、今、県教委の方が詳しいですが、小中高で県の5つぐらの地域、例えば、青森高校と筒井中学校、それから浜田とかの小学校4つで、小中高の連携を学校の種類、校種間連携推進協議会というものが、来年と2年間で立ち上がりまして、継ぎ目のない教育に関して研究をして、高校生が小学校や中学校に行つて授業をすつとか、自分がどういふうな勉強をしたとか、勉強に、家庭学習に興味を持ってもらうようにすつとか、高校の先生が小学校や中学校に行つて実験をすつとか、そういういふうな教育の連携をしていこうということに取り組んでおります。

先ほど、三沢商業の生徒さんたちも発表しましたが、やっぱり人は人で作られると私は思っています。いろいろな教育、もちろん、学校教育は確かな学力を身に付けさせて、心豊かにたくましく生き抜く力、健やかな体をもって社会の役に立つ有為な人財を作り、送り出すのが私たちの役目ですが、やっぱり、今までも多くの企業の御協力の下に、インターンシップなどのキャリア教育を進めています。外人やほかの大人の人たちと接することによって、やはり生徒たちは大きく成長していくと思います。

そういった意味では、先ほども意見が出ましたが、韓国との交流、あるいは県が提携していますメイン州との交流。ただ、メイン州との交流では、人的交流は高校生の20人の派遣、1年交代ですが、これしかないように感じています。ですから、そういういふうな交流を海外でやっぱり少しでも過ごしてくると、さらに一回りも二回りも大きく帰ってきますので、これからは是非、そういういふうな事業は続けて、人は人で作られるんだということを県でも認識していただければと思います。

(三村知事)

市町村で結構、そういう交流をやっているところもありまして、是非、会の方でもまた継続を。では千葉先生。

(青森県私立中学高等学校長協会 千葉会長)

初めてこの会に参加をさせていただきまして、人づくりということは、いろいろな方面での分野での人づくりというものがあると思います。青森県の人づくりって、やっぱり私、青森県の人づくりの1つとして、生徒たちが郷土に愛着を持つとか、郷土を知るといふことが、やっぱり非常に大事なことだと思ふんです、青森県の人間として。この青森県の良さ、そういうことを知るといふことが非常に大切だと。

さっき、私も、まだ食べてはいませんが、アイスクリーム、どこかのテレビで三沢商業さんのあれを知つて、いいところにお気付きになつたなといふうに、私は、生徒たちに青森県の良さを知る。それから、青森県産品、そういうものに興味を持つ、ということが1つ青森県の人間として非常に大事なことだと思つて、どうしようかな?と思つていたんだけど、一番やりやすかつたのが、調理科の生徒を使うことだつたんですね。調理科の生徒たち、知事にも召し上がつていただきましたけども、「サバップル」。やっぱりそういういふうな自分たちの身の回りにあるものに着目をして、そういういふうなものを大事にし、それからそういうものを利用して何かを作つていくと。そういうことで、調理科の生徒、わりと自分たちの

県産品を使って、いろんなものを工夫するんです。知事にも召し上がっていただきましたけども、美味しかったか、美味しくなかったかは分かりませんが、サバップルとって、奇抜なものを。そういうところからやっぱり、郷土という意識が生まれてくると思うんです。そういうことも1つ、人づくりの1つの分野だと思っております。

(三村知事)

大変ありがとうございます。

実は、私どもの戦略に「ふるさとあおもりを愛する人をつくっていこう」と書き込んでありまして、大変、千葉先生、本当に我々とぴったりの教育で御協力をいただいております。

折角、生徒諸君、二人座っているんだから、今日、いろいろと話を聞いてみて、どうしたら人財育成、人財育成というのなんだけども、どんなことを考えている？自分たちがどういう未来を、どういう人になって作ってみたいと。

(三沢商業高等学校)

皆さんの話を聞いていて、やっぱりまだ自分、今の高校生は知らないことが多過ぎると思うので、いろんな本とか、昔の人たちの話を聞いたりして、自分の考えをもっと深めていって、良い高校生になれるようにしたいと思いました。

(三村知事)

どうぞ、折角だから。

(三沢商業高等学校)

今日のこの話を聞いて、知らないことばかりで、お話があまり見えてこなかったんですが、今の高校生は、ニュースとか新聞とかあまり見ないので、一般常識とかがあまり身に付いていないと思うので、だから、一般常識を身に付けて、だらしのない高校生にならないようにしたいと思います。

(三村知事)

君たち、立派だよ。

知らないことが多いということはすごい。逆に言えば、いっぱい知ることが出来るし、若いし、すごく楽しいと思う。いろんなことを覚えられる。また、吉田健先生、このようにいっぱいいろんなことを知ってもらうような段取りをと。

あと、どなたかございませんでしょうか。こっちの方からどなたか。お願いします。

(青森県漁業協同組合連合会 蛸名総務部長)

まず、今までの取組事例があって、三沢商業さんの取組、成功したということで、すごい感動しております。

説明していただいた生徒さんが、すごく上手なんですね。おそらく、放送部のアナウンス科かどこか出ているんですか。でしょ。でないと、ああいう喋り方は出来ないと思うんです。

だから、すごく取組も成功して、かつ説明も上手だったということで、すごい感動しております。

先ほど言った規格外とか、あるいははじかれ野菜ということで、長いものであれば1千トン、あるいはごぼうであれば800トンのはじかれ野菜が出ていると。そうすると、青森県内でどれくらいはじかれているの？となった時に、これはとんでもない問題だと。それも、はじかれる野菜は、お金を払って業者が処理しているということになると、今のような取組が成功したということになって、これが県内どこでも同じような形で取り組んでいければ、青森県のはじかれ野菜、あるいは果物も無くなって、地産地消、そしてまた、地域の活性化にも繋がるというふうに考えております。

今日、農協さんが来ていないので、一言しゃべっているんですが。毎年、「青森県の農林水産業」という本が出されております。これは、県内のおそらく2万人ぐらいいるのかな。小学校の5年生の生徒さん方に教科書ではないんだけど、教科書のような本を出して、授業の一時間を切り割いてもらって、学習してもらえればということで、学校の皆さんにお願いしているところがあるんです。

ただ、実態は、そうでない。やはり、勉強の方が大事ということで、なかなかその青森県の農林水産業の本が活用されていないのが実態のようです。ただやっぱり、それは青森県が第1次産業って大変大事だ。青森県は第1次産業が潰れちゃうとダメなものですから、農業、林業、水産業ですね。これが、どれだけ活性化するかということの話の中で、やはり、小さい時からそういう学習をする。魚は切り身しか見たことがないという考え方をすれば、当然、それは人づくりをしなければならぬことに結び付いていくものですから、やはり、学習でもこれは何の魚だよと。これはどういう特徴がある、ということをお小学校あたりからでも教育していく考え方をしなければダメじゃないかと思えます。

いずれにしても、今回の三沢商業さんの発表は、ものすごく感動しましたので、それを1つ報告しておきたいと思えます。

(三村知事)

ありがとうございます。

こうした素晴らしい未来が育ってきてくれているということを私たち皆、心を強くするという思いでございます。本当にありがとうございます。

時間もそろそろでありますけども、どなたか、どうしてもということであれば、よろしいでしょうか。

そろそろ予定となりましたが、この辺で意見交換会を終らせていただきたいと思います。

本日、それぞれのお立場からいただきました御意見、十分に踏まえまして、「青森県基本計画未来への挑戦」、そして、「あおもりを愛する人づくり戦略」に基づき、引き続き人財育成、重点的に知事としても取り組んでいきたいと考えております。では事務局から何か。

(県企画政策部 小山内次長)

知事のお話にもありました、未来への挑戦という、こういう冊子、今年度からスタートしております。この中にも書いております、皆様には、このプロモーション編というのをお渡

ししてあると思いますが。この中の人財育成は、まさに礎となるということで位置付けられております。本日のお話を伺いまして、やはり人づくりというのは、その受け止め方など十人十色でありますけども、であればこそ、一本筋を通して、我がふるさと青森県の次代を作っていかなければならないなという感想を持ちましたし、また、三沢商業高校の皆さんの発表を聞いて、まさにそうしたことが現実にやれば出来るんだということを確認いたしましたので、こういった高校生の皆さんの動きを、むしろ大人の方に伝えていきたいと思っております。

(三村知事)

御苦労様でした。

それでは、これで議事を終了いたします。

ありがとうございました。

(司会・柏木T L)

皆様、どうもありがとうございました。

それでは最後に閉会にあたり、知事から御挨拶を申し上げます。

(三村知事)

では、閉会の挨拶でございますが、あおもりを愛する人づくり戦略。「愛する」という言葉を入れさせていただきました。常々、我々はやっていたわけですが、やっぱり基本は、千葉先生からもお話いただいた、自分の生まれ育った故郷が好きであること、愛すること、そこからいろんなことが始まってくると。知ることからいろんなことが始まり、その中で、自分が何をしようか。そうしたら、やっぱりこうしたい、ああしたいという中で学ぶ、行動する。それがまた次の世代に伝わっていく。大変に、人づくりそのもの、時間を掛けていくものであるでしょうし、また、小山内の方からもお話をさせていただきましたけども、一本筋は通すけども、いろんな方向性があるものでもございます。

しかしながら、着実に我々は大切な人づくり、あおもりを愛する人づくりという戦略の種をいろんなところにいろんな形で播いていき、それを着実に育てていく、それぞれの立場、立場で育てていくことが大切なのかなと感じている次第でございます。

結果が出てくるのはうんと先、彼女たちがお母さんになったりして、うんと先だと思えますけども、是非、今日、こうして参加したことを覚えておいてください。青森のことをもっと知って、もっと好きになってください。

今日はありがとうございました。

(司会・柏木T L)

以上をもちまして、第3回青森県人づくり戦略推進会議を閉会いたします。

本日は、皆様お忙しい中、大変ありがとうございました。